

先輩肉棒似の玩具絶頂と

強制M字晒し性交

競泳コーチ林葉響子のNTR第3話



競泳コーチ林葉響子の歴代彼氏たちは

なぜにNTRばかりなのだろうか？

## 第三話 先輩肉棒似の玩具絶頂と強制M字晒し性交

あまりよく眠れなかった夜が明けた。昨日元カレの三橋と勢いで屋外セックスをしてしまい、それを見た不良たちに輪姦されそうになり、それをスイミングクラブのスクール生に助けられるという事実を忘れたくて、優しい今彼のモモさんに抱いてくれと迫った。

そんな私を受け入れてくれなかったモモさんに、帰ってくれとあたってしまった私がいる。

今日のクラブでモモさんに会うのが気まずかったので、朝のうちにSNSでメッセージを送っておいた。

「昨日はごめんなさい。モモさんと過ごせなかった久しぶりの週末と、部屋を掃除していたら元カレの写真が出てきて、すごく不安な気持ちになってしまいました。これからは言いにくいこともちゃんと話ができるようにします。疲れていたのにごめんなさい」

モモさんからはすぐに返信が来た。

「気持ちを汲んであげられなくてごめんね。言いにくいこともあるとは思いますが、僕を信じて

話してね」

言いにくいことのレベルを超えちゃっているから……。

三橋とあんなところであんなことをしたこともだし、そもそもセックスが足りないなんて……  
ちよっと待てよ？私がおかしいのか、モモさんがおかしいのか？

当然こんなことは誰にも相談できない。いや、2人いる。私は大学の授業が始まるまでに、その2人にアポイントメントを取るまでを終わらせた。

「お待たせ。何よ相談って。響子みたいな学生と違って忙しいんだからね、手短にしなさいよ」

「わかった。お姉ちゃん、夜の生活はどの位？」

私はまず、3歳年上の姉を大学の近くにあるカフェに呼び出した。誰にもできない相談がある  
と言って。

「はあ?!相談って男がらみなのか？姉妹だからってねえあんた、よくもそんなこと相談できるわ

ね！まったく。週2回ってところよ」

「答えるんかい。ありがとう。足りてる？」

「あたしたち多分もうじき結婚するからさ。高校の時から8年ちょい。まあそんなもんじゃないの？」

「2回っていうのは、その、何て言うか、どっちの希望というか……」

「ハッキリ言いなさいよ。何が聞きたいの？」

「例えば元々週5回だったのを、お姉ちゃんが疲れるとか言って減らしたのか、月1回だったのを、お姉ちゃんが少ないと言って多くしたのか、そういうこと！」

「ああ、なるほど。あんた欲求不満なのね」

「そんなこと言っていないし」

「言ってるって。私はノブしか知らないのよ。だから他と比べようがないし、長い時間でなんと

なく作った2人のリズムだからね。食事が一日3回というのと同じ感覚かな」

「わかったありがとう。検討してみます」

「何を検討するのよ。最近週末帰ってこないじゃない。お父さん淋しがってるからたまには戻りなさいよ」

「検討します」

次は高校時代の友達にSNSでメッセージを送って、一緒にランチをする事になった。彼女とは今でも時々会って話をするし、SNSでも頻繁にやり取りをしている。まあ、親友と呼んで差し支えないと思っている。

「がらちゃん、こっちこっち」

私が高校時代の国語の先生がネタとして事業の中で、響子の響の字を使った面白い漢字として、響尾蛇と書いてガラガラヘビと読むという話をした。その後、私の強気な性格も相まって、ガラ

ガラヘビからガラチに縮小され、一般的の波に削られてガラちゃんと変化した。

「がらちゃん、今日は相談ってなに？」

彼女の名前は森永スミレ（もりなが すみれ）。ちょっとぼつちやりした体系と、のんびりしているしゃべり方と性格を持つ。精神的な耐性が非常に高く、どんな嫌がらせにも屈しないというか、気にしないというか、気が付かないというか。そんな人だ。

「スミ。まだ佐藤正（さとう ただし）と付き合ってるんだよね？」

「そうだよ。どこにでも居そうな佐藤正と付き合ってるよ」

「何年目だっけ？」

「えーと、高校2年の時からだから、6年くらいだね」

「スミは佐藤正1本だけなんだよね？」

「1本？1本で何？がらちゃんはエッチなのかなあ？」



「その……エッチに、不満とかない？」

「えー？ないことはないかなあ」

「どのくらいしてる？」

「がらちゃん、どうしたのよお。矢継ぎ早とはこのことだ」

「で？どうなのよ？」

「がらちゃんも知っての通り、私がただし君にベタ惚れで告白して付き合ってもらったんだから、当然1本ですよお」

「どのくらいしてるの？」

「そうねえ。お互い実家だからホテル代とかもね、かかるから、週に1回あるかないか？くらいかなあ」

「足りる？お互いに」

「うーん、私は一人エッチしているよ。だからノープロブレムだねえ」

「一人エッチ？……佐藤は？」

「わかんないけど、時々風俗とか行っているのかなあ？一人エッチもしていると思うよ」

「風俗かあ……佐藤は……風俗以外での浮気とかは？」

「ははは。がらちゃんも同級生なんだから、ただし君のこと、知っているでしょ？あの顔では難しいと思うよ」

「そうだね、スミが佐藤を好きになった理由が、アニメの趣味が良いっていう、私にとって謎な理由だったもんね」

「あーアニメを馬鹿にしたな。まあこれがミステリー小説の外国人作家のファン同士とかだったら、お互いカッコ良いのにね」

「ところで……その……あれ……一人エッチって……どうやるの？」

「私ががらちゃんにレクチャーできるものがあるなんて、思いもしなかったなあ。もうね、想像力に羽を広げさせてね、するんだよお」

「AVとかは見ないの？」

「ああ、私は見ないなあ。基本的に男性のために作っているものばかりだからね。私にはズレちゃってる。目をつぶって、現実を起こったら嫌だけど、妄想の世界ではたまんねっていうことあるじゃん？妄想の世界ではもう私すごいエロいから」

「例えば？」

「そうねえ。妄想の世界のOLの私がミスして、それをかばってくれた課長に誰もいない職場で、反省を態度で示せとか言われて、あんなしたり、こんなされたりね。他には妄想の世界の私がマッサージ師にあんなことされたりしてもう抜け出せない沼だったりね」

「十分AVっぽいわね。指でするの？」

「指でもするし、道具も使うよ。電気の力はねー、ただし君にはできない動きをするからねー、1本しか知らない私なんか、すぐにイカされちゃうよー」

「その……どこで買うの？どんなものの？」

そのあと私は、スミのスマホで、彼女がいつも使う通販サイトを見ながら色々な道具を紹介してもらった。

相談できる双方が、自称1人の男性としかセックスをしたことがないという点と、交際期間が長いと言う点。この2つで私と比べることがやや前提違いとなるが、それでも性行為が月単位ではなく週単位であることは把握できた。この社会的現実を、モモさんにどのように浸透させていくか。

＊＊



私の住んでいるマンションには宅配ボックスがある。不在の時に宅配便の人がその中に商品を入れておいてくれるものだ。

大学から家に戻ると郵便受けに不在伝票が入っていた。「城南情報機器様よりＩＴ関連部品」と書かれてある。本来この時間は、急いで準備をしてスイミングクラブに向かわなければならぬのだが……私はまだ明るい時間からカーテンを閉めて、宅配ボックスから取り出した「ＩＴ関連部品」の箱を目の前にして正座で向かい合っている。

箱に巻いてある透明のテープをはさみで丁寧に切り箱を開ける。

「おおお……」

私は声を出してしまう。箱の中の箱を開けると、そこにはＬ型の黄色い物体が鎮座している。スミが初心者にはここら辺からとお勧めしてくれた逸品だ。

全体の太さは、そう、高校時代に生徒として通っていたスイミングスクールの先輩イケメン選

手と同じくらい、私の指2本よりやや細めの太さ感。

長さはI型の短い方は私の親指くらいの長さ。5センチ位だろうか。

長い方は、そう、これもまた先輩イケメン選手と同じくらいの長さ。10センチ位だろうか。

もういつそのこと、この機械を小林先輩と呼ぼうかとさえ思い始めた。

表面は柔らかく、中は固い。ボタンが二つある。

時間がない中で、どうしてもこのままにしておけなかった。一つ目のボタンを押してみた。

短い方が振動を始めた。もう一度押すとさらに強い振動となり、さらに押すとより強い振動となる。静かな部屋に「ブーン」という音が鳴った。

私は今日履いているデニムの上から軽く当ててみる。ああ、なるほどなるほど。もう一度ボタンを押すと振動は止まった。

もう一つのボタンを押してみる。長い方が振動を始めた。短い方の振動は「ブーン」というよ

うな細かい振動だったが、長い方の振動は「ゴツゴツゴツ」というような大きな振動が、L型全体を揺らすような動きをみせた。

当然のように好奇心の拡大を止められなくなった私は、パンツと上着を脱いで小林先輩を直接クリにあてた。違う角度も試したくなり、四つん這いの姿勢で小林先輩をクリと割れ目を行ったり来たりさせる。

当然のように私は軽く、本当に軽くイッた。

私は選手コースを休んでしまいたくなったが、もう大人なので再度箱にしまった。万が一にも、今夜モモさんと一緒に帰ってくるようなことがあったら大変なので、ベッドの下にある衣装ケースのカーディガンにくるんで収納した。

スイミングクラブに向かう電車の中で、私はあの物体をバナナ君と呼ぼうか、それともサイズ的にぴったりの先輩イケメン選手の小林君と呼ぼうか悩んだ。



コーチ室でモモさんと目が合った。モモさんは声を出さずに口の動きで「お疲れ様です」と言い、目で「大好きだよ」と言ってくれた。小林君と呼ぶのはイケナイ事だという気がして、バナナ君と呼ぶことに決めた。

いつもより長く感じた選手コースのアルバイトを終えて、いそいそと一人で家路についた。

スミにアドバイスをもらったのは、初めにちゃんと洗う事。工場で作られている時には、それなりにたくさんの方の手が触れるから。自分自身はスクールでシャワーを浴びてきているし、急いで先に進みたかったので良しとした。バナナ君を丁寧にぬるま湯で洗った。

早速下半身だけ脱いでベッドに入り、まずは短い方のスイッチを入れた。

「ブーン」という振動を始めた短い方を、そつとクリトリスに当てる。

「ん……」

これは……味わったことがない感覚。L型の長い方を持って、色々な角度で短い方をクリにあ

てる。もっと強さが欲しくなり、強くクリに当てる。

「ハッ……」

眉間にしわが寄る。もっと強さが欲しい。クリへの刺激をやめなくなかったけど、一度外してボタンをもう一度押す。「ブーン」という音が強くなる。私はまたクリに押し付けた。

「はん……」

腰も動いてしまう……あ、ダメかも……。

「んハアン……アああ……ア！」

私の膝がピンと伸びていつてしまった。まだ入れてもないのに。

長い方は明日のお楽しみにしようかと思ったけれど、我慢できるはずもない。短い方のバイブを止めて、長い方のボタンを押した。

すでにヌルヌルグチョグチョになっている私の蜜壺は「スルツ」と長い方を飲み込んだ。

「ゴツゴツ」とした大きな振動が、私の中の淫壁を揺らす。ああ……これも、初めて……の、感覚……。

奥深くまで入れると、私の子宮は降りてきて「ゴツゴツ」振動は子宮を揺らし始める。

バナナ君をゆっくり出し入れして、淫壁と子宮を交互に揺らす。ああ、また、ヤバいかも……。

「ううう……アうッ」

私は二回目の絶頂を迎えた。

こうなると欲が出る。両方同時の刺激はどうなんだ？私は小さい方の「ブーン」という振動スィッチを2回押して、「ゴツゴツ」&「ブーン」状態のバナナ君を自分の中に入れた。

……これは……すぐ、イって……しまふ……。

突然バナナ君は静かになった。



「ええ?!」

私はたまらずに、電気の力ではなく自分の力で素早くバナナ君を動かした。腰も振って短い方でクリを擦りながら、長い方で中をかき回した。

「ヌツチヨヌツチヨヌツチヨ」という卑猥な音が部屋に響く。

「はン、はン、はン……オうん……あああん」

私は電気の力に頼らずに、自分の力で3回目の絶頂を迎えた。

しばらく脱力していた。これは……スッキリだ。持つべきは友人だ。スミ、ありがとう。

バナナ君をぬるま湯で洗ってしまおうと思い箱を見ると「充電をしてからご使用ください」と書いてあった。このまましまつては、明日の私が途方に暮れることに気が付き、とりあえずタオルにくるみ、充電をしてぐっすりと眠った。

明日は満充電で、ダブル刺激でイかせてもらおうと思う。

そういえば妄想は一切なかった。私が望むのはスミと違って、精神的なエッチというより肉体的？機械的？物質的、スポーツ的なエッチなのかもしれない。

次の日から、私はモモさんにイラっとすることが無くなった。

＊＊

夏も近付いてきたある日、大学に行くと友人から夏のアルバイトについて聞かれた。夏だけアルバイトをする概念は持ち合わせてなく一度も気にしたことがなかったので、ちよつと興味が出てきた。

友人が言っていた学生情報センターの夏のアルバイト特集を見ると、神奈川県海岸で「海水浴場のライフセーバー」のアルバイトを見つけた。これは面白いかもしれない連絡を取ってみた。

私の場合スイミングクラブがあるので、大学が休みになっても夕方以降までには戻ってこなけ

ればならない。この条件で働けるか心配だったが、私がスイミングクラブの選手コースのコーチであるという経歴が幸いして、朝7時から働けるのであれば面接に来てほしいとの結論をいただいた。

5時起きで5時半出発であればどうにか間に合う。23時に寝れば6時間の睡眠時間は確保できる。一人エッチを覚えた私はそれなりに満足しているし、ちよつと疲れている位であれば、モさんに対する欲求不満も減るかもしれないと思い面接を申し込んだ。

次の週の土曜日の午前中に面接へ行く事になった。モさんに言つて、いつもは土曜日の昼くらいからモモさんとデートをするのだが、夕方からのデートにしてもらった。

神奈川の海水浴場は数年ぶりだ。元カレと一緒に海水浴に来るような人ではなかったので、高校時代以来か。

面接はライフセーバーの隊長が行い、すんなり雇用が決まった。事前訓練などもあるから、夏

休みになったらすぐに来るように言われた。

訓練開始前に顔合わせとして、ライフセーバー全員が集まる親睦会が開催される。みんなの都合もあって2週間後の日曜日午後の予定とのこと。

面接の日のモモさんのお泊りは、一緒に居られる時間が短い分、モモさんがいつも以上に優しくしてくれた。セックスもいつも以上に優しく丁寧だった。心の奥ではもつとガツガツ来て欲しくもあったけれど、これがモモさんだ。

日曜日にモモさんの家からいつもより早めに出発して、私が働く海岸のそばにある民宿が経営している食堂に着いた。隊長がお気に入りのお店ということで、毎年ここで行われているらしい。





「それでは、ここに集まってくれたメンバーが今年の海岸の生命と安全を守るメンバーです。チームとしての行動ができるように、今日は無礼講でお互いを知り合いましょう。よろしく、そして乾杯！」

どこにでもある飲み会が始まった。

今年のライフセーバーとして、地元のボランティアのセーバーが8名とアルバイトが5名。それに隊長と副隊長の合わせて15名が親睦会に参加している。女性が5名と男性が10名のメンバーだ。

みんな席を変わりながら自己紹介をしている。自分も回った方が良いかな？と思っていると、隣に副隊長の押尾さんが座った。彼は小柄だけどイケメンだ。

「初めまして林葉さん。地元でサーフィンをやっている、副隊長の押尾仁（おしお じん）と言います。早くこの席に来たかった。正直、林葉さんを見た瞬間から、運命の出会いを感じて

しまっている27歳です。よろしく願います」

私はわざと少し眉間にしわを寄せて言った。

「運命の出会いを枕詞に持ってきた押尾さんのよろしく願いますは、何のよろしく願います何ですか？」

「それはもちろん運命の出会いを果たせた訳ですから、僕のことを知ってもらってこの運命を育んでいってもらうためのお願いしますだよ」

イケメンの笑顔はこれだから困る。私はとても気持ち良くなってしまう。

「湘南のサーフショップのイケメンオーナーなんて、押尾さんはさぞおモテになりそうですね」  
私は唇を尖らせて言った。

「とんでもないですよ。サーフィンばかりやっている僕なんか、童貞に毛が生えた程度です」  
「またまた御冗談を。押尾さんはどうしてライフセーバーをされているんですか？」

「誰かが悲しい思いをして、僕が大好きなこの海を憎むようになるのは哀しいですからね。この海が嫌われないようにしたいという気持ちですね」

「それはちよつと……素敵な理由ですね」

私の目をまっすぐに見つめながら彼が言った言葉に、内心ちよつとドキドキとしている。

「ところで林葉さんは競泳のコーチと聞いたのですが、ライフセーバーの認定資格はお持ちですか？」

「え？ そんな資格があること自体初めて知りました。どんな資格なんですか？」

そのあと押尾さんは席の移動はせず、私も他の席にあいさつに行かずに、ずっと2人で話をしていた。

懇談会が終わり、半数位のメンバーが2次会へ行こうと盛り上がりつつある中、押尾さんが2人で飲み直しませんか？と誘ってきた。

私はついというなずいてしまった。

その後のお店はちょっとおしゃれな湘南らしいお店で、私が大学で受けている授業について興味を持ってくれて、理学的な人体の話など色々聞いてもらった。

そこからつながる自分の将来とかについても、久しぶりに語ってしまった。彼は話も上手だけど、何より聞き上手だ。私はそれ以外にもコーチとしての悩みを話したり、最終的にモモさんへの不満すら口にしていた。

そして気が付けば押尾さんとホテルに入っている。さすがに今日知り合った人とホテルに入るのは初めてだ。一人エッチを覚えて満足しているつもりだったけれど、やっぱり欲求不満なんだと思った。

この押尾さんはイケメンで、女性慣れした聞き上手さと、女を持ち上げる巧みさで、私の背中を押してラブホテルまで連れてきた。